

PHD LETTER

59

1996・6

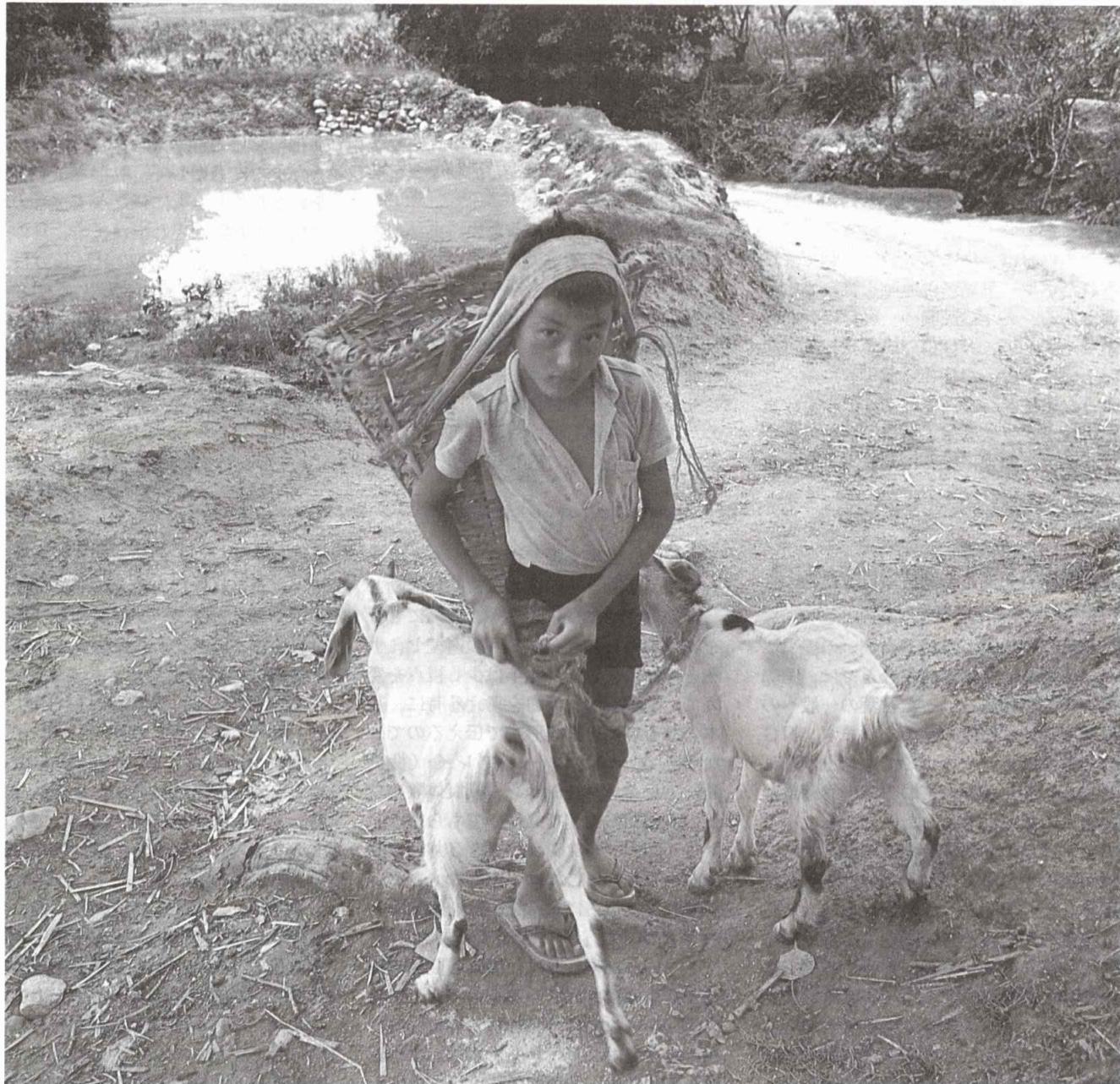
PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

- 何か変わった? トーコちゃん 3 P
- スム・ソコム君を訪ねて 6 P

おのののの物そして心の両面の10%をささげ 世界に平和と健康をつくりだす人を——。

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじめました。

発行: 財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
編集人: 草地 賢一
住所: 〒650 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202
TEL (078) 351-4892 FAX (078) 351-4867
定価: 100円



ネパール、マンナンマハデブスタン

クンタ村ですれちがった少年。
子山羊を連れて山道を降りてきた。
エサにする草や葉を入れるかごを
額にかけている。
子どももだいじな働き手。

神戸のまちから ~まだまだ続く震災復興への道のり

4月1日にPHD協会に帰ってきました。一年以上にわたって私の抜けた間PHDの事業を担ってくれた職員に感謝するとともに、このような体制を承認し送り出して下さった理事会にも併せて心からの感謝を申し上げます。

事務所に毎日出ているものの、実際の日常はまだまだ3月まで進めてきた阪神大震災地元NGO救援連絡会議関係の動きが中心です。従って連絡会議の事務所にも必要に応じて出かけています。

連絡会議は96年3月末で終了する事を前提としていました。それは何回か活動途中でも内外に表明してきました。ところが、昨年暮れから震災一周年の時期にかけ、連絡会議の関係者から存続の意見が強くなりました。

その内容は、主に震災救援活動で注目されたボランティアの運動を継続する必要がある、とくに民間の、純粋に民間のボランティア、NGOの旗を立て続けないといけない。なぜなら震災前にあったような市民が行政にすべてを依存し、また行政がボランティアを自分たちの都合で下請け、補完に使ってしまうような状

況が当たり前になってしまふ、というものでした。

関係者による協議の結果、継続することになり、事務所を長田に移すこととし、4月からの運営について話し合いました。

①連絡会議は被災地内外に救援、復旧の活動と、その中にある問題、課題を発信する。

②連絡会議は95年度の経験をふまえ、現在も活動を続ける各地域の団体、グループをネットワークする人々の間にあって連絡調整する役割を担う。

③被災者の復旧の条件づくりなどに必要な世論形成のための提言活動などを進める。

④これらの働きを進めるためにボランティア養成に力を注ぐ。

以上のようなまとめをしたあと、私は専従から非専従の代表となり、日常的には運営委員会の幹事と事務局のスタッフに運営を託しています。

しかし徐々にPHD協会の運営に仕事のウエイトを移していくと思っています。特に力を入れて取り組みつつあるの

は財政の問題です。

昨年95年度は震災による特別な状況の中で、特に全国からのご支援でPHD協会の財政は幸いにも満たされました。しかし今年度は極めて不安定で厳しい見通しです。というのは会員、協力者の約3割が被災地に住む方々であるからです。すでにそれらのひととの何人かからは支援の継続が困難であるとの意思表示がなされています。

そういう不安の中で私たちは「被災地から国際協力の灯を消さずに続けていくたい」との切なる願いをもっています。

さらに今までPHD協会が活動継続の最大基盤においていた市民による参加、支援の動きを逆に今回の震災の中でより強化したいと願っています。

今までにも増して、みなさまのご支援をいただきとともに新たな支援者の増加に協力をお願い申し上げます。具体的には、会費1口5,000円のPHD会員、できれば3,000円程度を支援して下さる友の会会員を近くの方々に呼びかけていただき一人でも多くの方が加わってくださるとありがたいです。

どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

総主事 草地 賢一

『国際協力を支える動機づけのために』

PHDの活動が岩村ドクターの提唱によって始まった15年前と今とでは、国際協力や国際理解といった言葉の一般への浸透度合には格段の差があります。NGOの数は増え、マスコミで取り上げられることも多くなり、この分野の書籍数は何倍もの数になりました。だからといって、PHDの会員数が大幅に増えたり寄附がたくさん集まつたりということには直結していません。他のNGOの人たちと会合で出会った時の話題も、どうやって人を集めのかとか、どうやって支援の輪を広めるかということが多く、ウチだけでなく同業の皆さんも苦労しているようです。ひょっとすると一定数の理解ある人たちをいくつもの団体で取り合う状況になっているのかもしれません。

知識として、世界に様々な問題があり協力しあうことはいいこと、はそれなりに伝わっているのでしょうか。しかし、それが「私」に関係があるのか、「私」がしなければいけないことなのか、というところになるとトーンダウンしているのではないか。どうすればいいのか、どうやって我がこととしてもらうのか。

昨年も、震災支援で盛り上がったボランティア活動をその後の日常的な活動として定着させよう、国外への活動にも目を向けてもらおうと、6回の連続セミナーを行ないました。今年は少し視点を変えて、国際理解や協力を考える時に、基本となる事柄を講義形式で伝えるのではなく、ゲーム、ロールプレイ（役割劇）、シミュレーション（模擬体験）などの参加型の内容で気付いてもらおうという4回のワークショップを5月、6月に組みました。これは一方的なメッセージではなく、自らによる気付きを促そうというものです。

2回目は、テレビの取材もあり、レポーターも加わってのロールプレイ。ふたつに分かれて、異文化体験をするもの。もうひとつはコミュニケーションの難しさを実感する作業。皆、とても真剣に取り組み、そこからの気付きには大きいものがありました。

3回目は、世界の経済のしくみ、公正な分配を考える寸劇とチョコレートをめぐるシミュレーション。最終回はスクエアゲームを通じて協力することの大切さを考え、その上でこの4回を通じて気付いたことをどうやって他の人に伝え、仲間を増やしていくかの作戦会議で締めくくりました。

この種の試みの1回2回で目的が達成されるものではありませんが、根本となるところの理解を広めていく積み重ねがいずれ形となってあらわれることを願うものです。この種のワークショップは出来前もします。興味のある方はご連絡下さい。

（藤野）

の持つイメージとの差を知る作業と危機状況におかれたら10人をどの順位で救い出しきるか個人とグループで決める「順位付け」の作業、そこからは様々な人間に対する価値の認識が見えてきます。

2回目は、テレビの取材もあり、レポーターも加わってのロールプレイ。ふたつに分かれて、異文化体験をするもの。もうひとつはコミュニケーションの難しさを実感する作業。皆、とても真剣に取り組み、そこからの気付きには大きいものがありました。

3回目は、世界の経済のしくみ、公正な分配を考える寸劇とチョコレートをめぐるシミュレーション。最終回はスクエアゲームを通じて協力することの大切さを考え、その上でこの4回を通じて気付いたことをどうやって他の人に伝え、仲間を増やしていくかの作戦会議で締めくくりました。

この種の試みの1回2回で目的が達成されるものではありませんが、根本となるところの理解を広めていく積み重ねがいずれ形となってあらわれることを願うものです。この種のワークショップは出来前もします。興味のある方はご連絡下さい。

～何か変わった？ トーコちゃん～

大学1年生の時からPHD協会事務所に出入りし、いろいろなプログラムの企画・運営に参加してきた篠原登子さん。卒業後NGOでの滞在を中心とした8ヶ月をインドで過ごし、いろいろな体験をしてこられました。

編集部（以下）：昔から途上国で働くのが夢だったんだって？

登子（以下）：そう。卒業後インドに行くって決めた大学4年生の初め頃まではね。

へ：てことはそれから考えが変わった？

と：うん。PHDの活動や考え方を知っていくうちに、国際協力ってのは外部の人間が現場に飛び込んでやるだけではなさそうと思うようになって。だから、最初インドに行くって決めたときは、現地で働きたいけど今の私には技術も知識も何もない。だけど今、現地では何が必要とされているのかをまず見てこよう、と思ってたわけ。でも最終的にインド行きの目的は「ちょっと途上国で暮らしてみよう。その経験は今後国際協力やっていく上で何かの役に立つやろ」というくらいの、イイカゲンなものになってました。

へ：でもなんでインドやったん？

と：理由は簡単。こんな私のためのプログラムを立ててくれができる人として、PHDが紹介してくれたのがNGOコンサルタントのポール・シロモニ先生。彼がカルカッタに住むインド人だったから。別にサイババに会ったかったわけでもヨガの修行で悟りを開いて新興宗教始めようと目論んでたわけでもありません。

へ：ところで日本のNGOとインドのNGO、だいぶ様子が違つたでしょ。

と：まず規模が全然違う。インドのNGOはでっかい所が多かった。それから日本ではNGO=国際協力のボランティア団体でしょう。でもインドではNGO=日本でいう福祉団体。あるいは日本では保健所や学校がやっているようなこともNGOがしてました。例えば乳幼児検診や予防接種をしたり、普通の学校には経済的に行けない子どものために夜間の学校を開いたり。

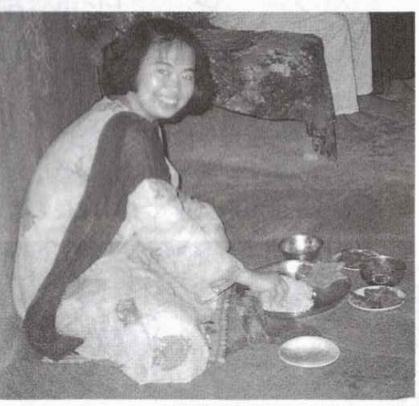
へ：実際にどんなNGOにワラジを脱いだの？

と：ムラの開発を進めるグループ、女性の地位改善に取り組むグループ、あるいはスラムや児童労働などの都市の問題を扱うグループなどです。それにあの有名なマザー・テレサのところも。

へ：外国のNGOはどういう形でインド

を支援してた？

と：インドの場合、地元のNGOがすごくしっかりしててころが多いから外国のNGOが主導権を握るという形は少ないみたい。インドにはインドのやり方があって、それは外国のNGOには簡単に分かるもんじゃないと思う。インド人のNGO職員たちでさえ、どうやって現地の人に溶け込むか、どんなアプローチがその地域の特性に合っているのか悩みつつやっているのが現状なのに。だから、現地の人たち、NGOが主体で、外国のNGOはそれを外側から支えるという関



家庭に招かれ食事中（西ベンガル州）

係でお付き合いをするのがいいんと違うかなあ、と思いました。その相手のNGOを見極めんのが難しいんだけど……。

へ：それってインドの場合のみに言えること？

と：うん、どこの国の場合でも同じだと思う。国際協力の、開発援助のNGOがどつかの途上国を援助する場合って、お金とか時間とかの労力の割にはあまり報われてないなあって気がする。それだけならまあいい。ソソしてるのはこっちやから。でも、外国からポンと入ってきたNGOってどこまでその国のために、その地域の人たちのためになる活動ができるんやろ。結果がうまくいけばいいけど、そうじゃなく、ひっつき回すだけに終わるなら何もしないほうがましかもしれない。何もしないよりは失敗に終わるかもしれないがやつてみる方がいい？でもそれで失敗した時に「ごめんなさい」で済むかなあ。インドのNGO活動を見ていて、私たちなら、絶対にやらないだろうと思われる方法を取っているケースを何度か見ました。でも、よく話を聞いてみるとそれが一番いい方法であったり、あるいはそうせざるを得ない社会状況が背後に隠れています。そのところを外の人はいったいどこまで理解できるのかなあ。

へ：PHDの研修生が日本に来て自分の村、国のことについて目を開かれるのと同じようにこちら側の目を開くことも大切なんだろうね。

と：そういうことって一人で考えていてもラチがあかんから教師になって、わかる人を増やしたいと最近思い始めたんだけど、どお？

へ：だんだん将来が見えてきたね。PHDの人づくりは海外の人だけが対象じゃないって実感できるわ～。

と：へへへ……。

形で外に出でていてるでしょ。それを全部否定するの？どこのNGOも試行錯誤を繰り返し、葛藤もしながら、より良いと思われる道を探してると思うけど……。

と：全部を否定するわけじゃないけど中には勘違いNGOもあると思う。本来的にNGOって『いいこと』をやってるわけでしょ。でもその思い込みが激しければ激しいほど、その活動にマイナスの面があることに気付くのが遅くなるだろうし、もしかしたら全く気付かないかもしれない。NGO活動には必ずプラス、マイナス両方の面が出てくると思う。なかなかすぐ目に見えるものではなかったりするけど……。

へ：じゃあ、登子ちゃんは今後どう国際協力にかかわっていくつもり？

と：それがインドに行ったせいでよくわからんようになってきて……。昔はよかったです。単純に『かわいそうな人に何かしてあげたい』と思って、歳末助け合いの時期に海外向けて指定して送金してたら満足できたから……。

へ：ところで『国際協力』って何なんやろね。国際協力というと相手側を変えようとしがちだけど。例えばインドと日本について考えた時に、ある問題がインドのその地域の中に原因があり起こっているものだとしたら、それは日本の私たちとは関係ないかもしれない。でも国際、国と国との関係の中に原因があるのなら私たちにも責任がある。このふたつは分けで考えないとね。

と：なるほど。そう考えたら私としては、前者は地元のNGOに任すと割り切りたい。実はインド行く前から薄々思つててんけど、日本がほかの国に及ぼしているマイナスの影響をなくすこと、私たちの生活を見直して迷惑をかけていたらそれを減らしていくこと、一見地味だけどそれが一番根本的な国際協力なんじゃないかなあ。

へ：PHDの研修生が日本に来て自分の村、国のことについて目を開かれるのと同じようにこちら側の目を開くことも大切なんだろうね。

と：そういうことって一人で考えていてもラチがあかんから教師になって、わかる人を増やしたいと最近思い始めたんだけど、どお？

へ：だんだん将来が見えてきたね。PHDの人づくりは海外の人だけが対象じゃないって実感できるわ～。

と：へへへ……。

13期生

研修生レポート

3月21日から30日まで、13期生のビショさん、カエウさんはフィリピン、ルソン島中部のヌエバエシハ州ガバルドンでCommunity Organizing—地域組織化についての研修を受けました。地域組織化の内容とPHD協会の海外協力団体のひとつであるSAFRUDI(注)がすすめる村づくりの考え方、方法を紹介します。

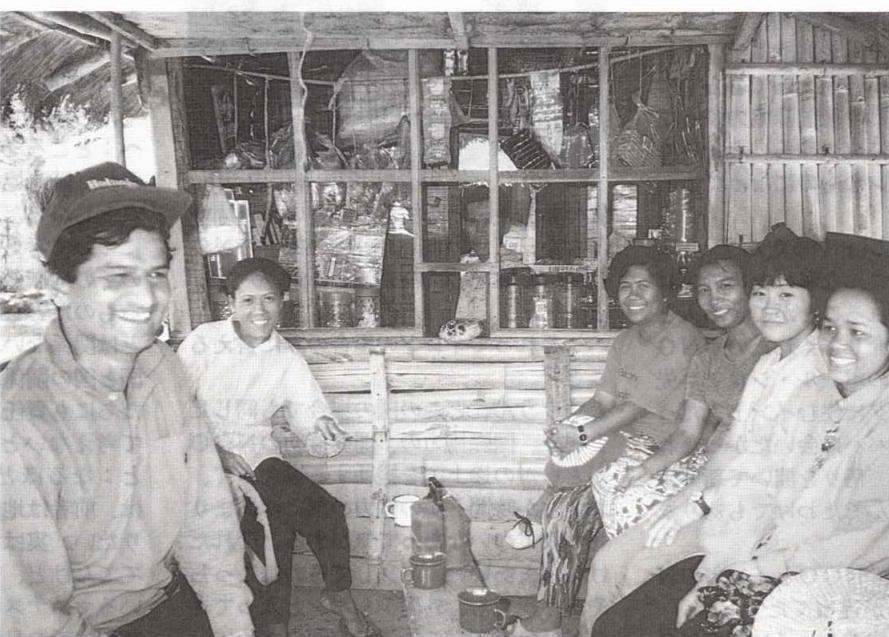
「村づくり」というと、水道を引いたり、トイレを作るという結果に目を向けがちです。けれども誰が、どのようにすすめるのか、そこにいたるまでの過程が大切なのです。

今回訪れたガバルドンでは、外部から来た人が何かをするのではなく、そこに住んでいる人が自分の抱えている問題に気付いて、それを解決していく過程に参加していくけるように地域組織化を行つて、地域の問題に取り組んでいます。

地域組織化は、いくつかの段階を経て行われます。まず、村の外から入った人(Organizer)が政治、経済、文化等も含めた村の状況を把握し、同時に、村の中からリーダーとなる人を探して育てていきます。村の人を巻き込むことによって、彼ら自身の手で色々な活動が行われるようにになります。大切なことは、外から入った人が効率良く問題を解決しようとすることではありません。地域組織化の過程を通して、村の人自身が村の問題に気付いて、意識が高まり、自分で解決しようとすることなのです。

ガバルドンで活動しているSAFRUDIは地域組織化を行う中から、女性のグループや農民のグループを作つて村の生活改善に取り組んでいます。SAFRUDIのスタッフがグループ作りを行うのではなく、ゆっくりと時間をかけて、何回も話し合いながら、村の人を中心になってグループを作っています。

女性のグループは約15年前から始まりました。主に栄養、衛生の問題に取り組んで



左より、ビショさん、93年度短期生ヨリーさん。右からカエウさん、国内研修生谷さん。村のサリサリストアの前に。

めに、どうすればいいのかを考えるようになったと話していました。

農民のグループは昨年始まつばかりです。山の木がほとんど無くなってしまっている等の環境問題や、農薬の害、またその経済的な負担を考え合わせて有機農業をすすめようと試みています。メンバーには有機農業は環境や健康に良いという理解と、それに対する興味は充分にあるように思いました。けれども、実際に誰が、いつ、どんな形で有機農業を始めるのか、というような具体的な話になると、「もしも、失敗したら私の生活はどうなるのか」というところで先へ進めなくなってしまっているよ

うでした。「もしも、失敗したら」実際に困るのは彼らとその家族で、外からやってきた人ではありません。外の人間が、有機農業が必要だという知識や技術、資金を持ち込んで地域の人に指示を出して行うのではなく、時間はかかる結果として起こる影響を直接受ける人が、必要を感じて、自ら始めるのを待つやり方はとても現実的であるように思いました。

ビショさんは、送り出し団体であるSSS(ママ・セイ・ムハ)の活動との比較をしながら、熱心に見学していました。村での活動はだいたい同じということでしたが、その中でも農民のグループとの交流は、大変興味深かったです。交流のあと「(もしも失敗したら…と話していた)あの人は本当の気持ちを話していましたね」と、ビショさん自身がネパールに帰つてから日本で勉強した有機農業のことを伝えていく大変さと重ねあわせて考えているようでした。カエウさんは、ガバルドンの村とカンボジアの自分の村を比較して「フィリピンの村は井戸も家の中にあるので、みんな手を洗つたりできる

し、トイレもあっていいですね」と、自分の村とは少しづつ事情の違うフィリピンの村の生活の工夫を参考にしていたようです。

(注) SAFRUDI=Social Action Foundation for Rural & Urban Development Inc.

都市と農村の両方から生活改善に取り組む団体。毎年、研修生が帰国前に出身地域とこれまで学んできた日本、さらにもうひとつ別の地域の村づくりを比較するために訪れます。93年度の短期研修生オリンピアさん、今年度のミノさんの送り出し団体でもあります。

ビショジョティ・サプコタさん

(ネパール)

中野宗嗣氏(兵庫・春日町)～渋谷富喜男氏(神戸市西区)～菜のはなの会(神戸市垂水区)～山崎佳彦氏・和歌山県海友会(有田市、和歌山市)～安達一博氏(豊岡市)

フィリピン研修旅行を無事に終え、暖かくなってきたところで、野菜栽培の研修を中心に学んでいます。技術的なところでは、やはり土づくりが中心となります。多品種少量栽培が農薬・化学肥料といった農業への多額の投資を減らしていくことにもつながるため、混作や輪作の方法について関心を持っています。

これまで多くの農家で滞在しながら研修を続けてきましたが、お世話になってきた方々はそれぞれ教育、行政、農協、ボランティア等いろいろな活動に取り組んでいます。そういった地域活動への参加から組織運営、コミュニケーションの方法等を熱心に観察していました。リーダーとして何が要求されるのか、実際の例から学ぶことができました。

帰国を控えて、まとめ、レポート作成などで忙しくなってきました。



渋谷富喜男さん宅で野菜づくりを学ぶビショさん

14期生

ビドゥル・ビスタさん(ネパール)

以前、インドネシアのサムスアリスさんをお世話いただいた西宮市の芝川恵子さん宅がホストファミリーです。ビドゥルさんは来日前に日本語を相当勉強してきていたので、今のところ一番よく話しています。ビショさんがいるのも心強いでしょう。



ミノさん

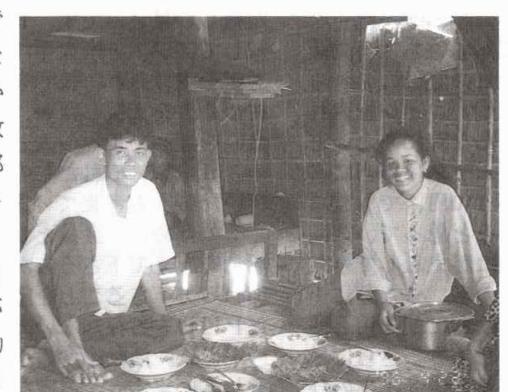
マキシミニアノ・T・トレドさん(フィリピン)

ミノさんで4人目の研修生をお世話いただく西宮市の梶原正徳さん宅。ここではミノさんは2人の子どものお兄さん。フィリピンに3人の子どもを残して来ているだけにとても仲良くしています。無口だと思われていたミノさんですが、最近は日本語がたくさん出てくるようになりました。お酒を飲むととても陽気な人です。

帰国間もないカエウさん(13期生)を訪ねてきました

フィリピンでの比較研修を終え、4月1日にカンボジアに帰国しました。

カエウさんの家は2人のお姉さんの家族も含めて12人家族です。家の仕事もこなしつつ、来日前にかかわっていた識字教育の先生やバティ郡で活動しているNGOの事務所を訪ね、日本で勉強したこと話をしたりしながら、これから具体的にどんなことができるのか一生懸命考え



バティ郡で出会えたヴァナさん(左)とカエウさん

ていました。

近所に住む11期生ノップ・ヴァナさんにも会いました。家族と一緒に米、野菜、マングゴー等を栽培しています。とても元気そうにしていました。

(谷)

スム・ソコム君を訪ねて

これまで多くのPHD研修生の農業研修を引き受けていただいている兵庫県丹南町の渡辺さんが、96年2月、兵庫県町議会議員行政調査団の一員としてカンボジアを訪問、研修生に再会してこられました。

カンボジアからのPHD研修生スム・ソコム君とノップ・ヴァナ君の二人が日本に来たのは1993年5月から的一年。

ソコム君は国立バティー農業試験場の技師、ヴァナ君は若き農民であった。内戦で荒廃していた国を復興させる道は8割を占める農業の復興にこそあるとして、その道を頑なに描いているらしい日本での発言が思い出される。

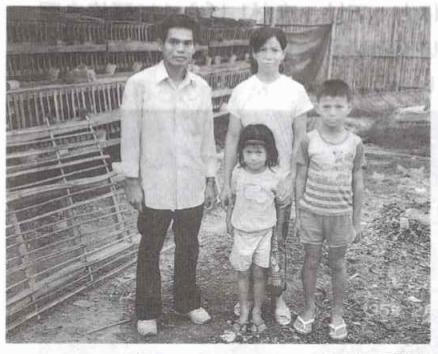
「カンボジアはもともと農業生産に恵まれた豊かな国であったが、長い内戦で道路や水路が破壊され糧ができず、物も運べる状況にない。その復興は急を要するがお金がない。」

「鶏はカンボジアでも飼える。餌もある。帰ればやってみたい。」

「堆肥をつくり、土を耕す有機農業の実験をやってみたい。」

といったことを思い出す。ソコム君は私の家で研修に励んだ青年の中でも5本の指に入る優秀な青年であったが、帰国後の便りは普段と切れたままであり、PHD協会でも一番情報の途絶えている国である。

ブノンペンに着いて約束の時間に2時間遅れてソコム君の顔が見られた。2年ぶりの元気な姿に安堵。翌朝6時、ソコム君のバイクでブノンペン郊外の農村部へ約20分走って到着。5アール(150坪)程の敷地を枠で囲った中に住宅と鶏舎があった。ケージ式鶏舎を竹で自作して、成鶏700羽大雑1,000羽を飼っている。産卵率65%。産卵率がよくないと収支儲かっていないことを気にしている。飼料は丸のままのトウモロコシ、干し魚、貝殻を粉碎機で砕き米ぬかなどを加え配合。鶏舎の屋根はトタンで周囲は細い金



鶏舎の前で家族

網で囲っているが内部は暗く風通しが悪い。大雑は群飼ケージを竹で自作しているが一群30羽程は入っていて密飼い。ここも通風悪い。成鶏舎を囲う細い目の金網にはくもの巣がはり風が通りにくい。

鶏に一番大切なのは空気。成鶏舎の金網を取り外し風通しをよくすること。育成舎の囲いもとり、一回の育雛回数を半分にすること、鶏がやせているのは餌の

配合割合を点検することなどを指摘しておいたが、ソコム君の気持ちの中には増羽拡張の意志ありと見たが残る敷地のスペースから見ても無理しない様注意しておいた。注意はしたもの、2年間程の間でよくやったものだと思う。現地ガイドのミウラさんも「あれだけの鶏舎はカンボジアでは非常に先進的なものです」と言っていた。

ソコム君は一年前に仕事内容が変わり、ブノンペンの農業局で「灌漑用水」関係の仕事をしているよう直接村へ入って生産指導することがなくなっている。もっぱら自らの宅地の中で鶏飼いで生計がたつ実験を始めている。

今カンボジア人の庶民の生活は苦しい。国民のほとんどが何らかのアルバイトを見つけなければ生計が維持されないと。ソコム君は農業局から家に帰つて鶏の世話、バイクでタクシー、奥さんを学校まで送迎するという日課を過ごす。

ソコム君の身内11人のうち10人までが虐殺、強制労働、栄養失調でなくなっている。奥さんも似た境遇の孤児であるが、その苦難の道を乗り越えたためにこそ、日本から持ち帰った養鶏をわずか2年の間で一応の形を作り上げたのだと思う。今ある問題点も克服して必ず成功させるだろう。自らの実践を通して生活を支えるに足る養鶏をカンボジアの地で確立してくれることを信じている。

渡辺 省悟

6月は会費の納入をお願いしています。

110円×○=五千円

今年も早や6月を迎えた。6月はPHDの活動が始まった月です。今年で16年目になりました。長く続けてこられたのも皆様のお支えによるものと感謝申し上げます。

会費の納入をお願いする時、普段私たちがお金をどんな時にどんなふうに使っているのか、いろいろと思いを巡らします。またこの話題で事務所に出入りされる方々とお話しすることができます。この季節、外をまわる仕事の時、喉が渴くことがあります。見ればあちこちに自動販売機があります。テレビの宣伝にのせられていると思いつつ、ついコインを入れている私がいます。そんな時にちょっと待った、この1本のジュースは本当に必要なかしら。たかが110円、でも重なれば結構大きな額になると思って、3回に1回いや5回に1回はがまんしてみたらどうと問うもう一人の私。また月に1回2回友との外での飲食に何千円と使ってしまう人もいるでしょう。さらに趣味に関しては、あまり考えずサイフのひもを緩めているという話も聞きました。

PHD会費は、年に一回、1口なら5

千五百円の有意義な使い方

決して、必要以上の消費を煽るつもりはありません。でもこの夏、同じ買って着るなら、PHDの新デザインのTシャツ3種から。テーマは唐辛子。

なぜ唐辛子なのか? 辛い! スパイシー、燃える、熱くなる、エスニック料理に欠かせない、いろんな意味でアジアを感じるものとして、今回テーマに選びました。そしてその熱さはPHDの活動にも通じる。

この唐辛子シリーズは製作会社ビルボードの社長の心意氣で、特別価格1,500円。白地の綿100%。従来の素材とは異なり、寸法は大きめ。MとLがありますが、従来サイズのLとL相当。

厳しい財政状況克服に一枚ご協力を!



(小松)

1号 2号 3号

PHD NEWS

会費・ご寄附寄託状況

1996年 2月	129件	2,958,460円
3月	145件	1,892,222円
4月	112件	1,010,375円
	386件	5,861,057円

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄附を頂戴いたしました。ご協力に厚くお礼申し上げます。

PHD協会の理事が交替しました

5月9日開催の第36回理事会において鰯坂二夫氏、崎山昌廣氏、藤本和弘氏が退任し、かわって三木康弘氏、和久克明氏が就任しました。

テレホンカードも送って下さい

今までご協力いただいているロータスクーポン、グリーンスタンプ、ブルーチップや書き損じおよび未使用ハガキ、あるいは未使用切手に加え、テレホンカード(未使用、使用済とも)にも、研修生を支え、また彼らの村づくりのために一役買つてもらうこととなりました。

未使用、使用済の区別の上、ある程度まとまつたらPHD協会へ送って下さい。ひとりひとりの力は小さくても、同じ気持ちが集まれば大きな力になることは、書き損じハガキによる支援と同じです。

第6期林業体験合宿「枝打」

林業体験と環境問題を考える学習会。
とき 1996年8月1日(木)~4日(日)
ところ 兵庫県多紀郡篠山町・丹南町他
さんか 小中高生 ¥18,000
それ以上 ¥20,000
(リーダーは実費で)
詳しくはお問い合わせ下さい。

あなたの目で見て感じて下さい!!

日本での研修を終えて帰国した研修生たちを訪ねる旅。村の人との交流から、村での生活から学んで下さい。申込み締切は各々出発の1カ月前。



①パプア・ニューギニア

日程 7月25日~8月4日 10泊11日
訪問先 モロベ州レイ、フィンシャーフェン
定員 5名
費用 一般 ¥288,000 会員 ¥278,000

②インドネシア

日程 8月18日~28日 10泊11日
訪問先 西スマトラ州パダンおよび漁村
定員 13名
費用 一般 ¥240,000 会員 ¥230,000

③ネパール

日程 8月29日~9月7日 9泊10日
訪問先 カトマンドゥ、ポカラおよび山村
定員 10名
費用 一般 ¥225,000 会員 ¥215,000

第11回草の根生活塾

かやぶき民家の簡素な生活、草とり、牛の世話、アジア交流会など盛りだくさん。
とき 1996年8月1日(木)~4日(日)
ところ 兵庫県多紀郡篠山町・丹南町他
さんか 小中高生 ¥18,000
それ以上 ¥20,000
(リーダーは実費で)
詳しくはお問い合わせ下さい。

南の風、いま神戸から

フィリピン教育演劇協会PETAのメンバー、フィリピンの歌姫デッサ・ケサダさんを神戸に迎え、ギターの弾き語りによるコンサートを行います。

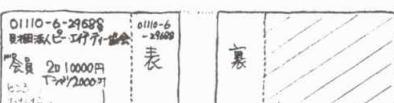
日時 7月5日(金) 18:30~20:00
会場 神戸YMCAチャペル
神戸市中央区加納町2-7-15
078-241-7204
参加費 前売り ¥700 当日 ¥800
PHD協会で発売中



南の風、いま神戸から

郵便振替用紙のご確認を

郵政省の新処理システムの導入に伴って振替用紙の裏面に連絡事項を記入されても当会には届かなくなります。今後は連絡事項はすべて表の面のみにご記入下さい。



もうこの面は
メッセージも書けます。

新職員、紹介します

3月まで国内研修生としてPHD協会で研修を行った谷朱子(たにしゅこ)さんが、5月より嘱託職員となりました。PHD協会の最大学問、神戸市外大卒。4月にインド、カンボジアをめぐり、十分に充電しての登場です。よろしくお願いします。

始。中国野菜だけではなさそう。希望の方は20:00~22:00の間に0795-94-4021まで。



前号(58号)にカレンの布のチラシを同封しました。それに対し各地から反応をいただきました。

裁縫が好きという、お声から察するところご年配の女性から電話で注文があり、「何ができるかお知らせ下さい」と書き添え、送りました。少しして「羽織をつくりました」とのお電話。高齢なのでその羽織をもって事務所を訪ねることは難しいとのことでしたが、とても嬉しい思いでした。1枚のチラシが楽しいやりとりにつながりました。



編 集 後 記

本誌「PHD LETTER」の編集後記は「編集後記」という名のコラムで、編集長から指名されたボランティアの人とかが思いのままを書いとったんですが、今回は「ホンマの編集後記

を書くべし」との編集長の命を、私が受けました。

気づいてる人もいるかも知れませんけど、本誌は54号（昨年4月）より変わりました。どこが変わったかといえば、それまでデザインとか版下作製とかをプロの人に頼んでたんですが、経費削減のためWINDOWSとかDTPソフトとかを導入して自分で行うようになったんです。それで字とかが今まで手書きだったのがコン

ピュータの字になつたりと、何となく変わってます。

その分事務所での作業が増えたわけですが、原稿のワープロ入力（一太郎、OASYS）とか編集作業（Page Maker）とかをお手伝い下さる方おられましたらお願いしたいです。最近は編集に携わる人も固定化してるんで新たな風を吹き込んでくれる方をお待ちしております。

WAT'S

**新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため
掲載しておりません。**